韓国・日本漢字音における重韻の問題

黄　光　吉

概　要

同一韻摂内で等位を等しくする，所謂重韻については，その再構音に諸説があるだけでなく，韓国漢字音や日本漢字音のような外国字音，特に韓国漢字音との関連に問題が少なくない。韓国漢字音の蟹摂のⅠⅡ等をみると，咍韻類／—ɐi（開），—oi(合)／：泰韻類／—ai（開），—wai（合）／のように現れて，重韻の区別とよく対応しているようにみえるが，具体的に調べると，かなりの反例が現れるだけでなく，泰韻合口の場合は／—wai／が期待されるにもかかわらず，殆どの用例が／—oi／と現れて咍韻類合口との区別を示していない。また蟹摂以外の，重韻が含まれている他の韻摂の場合は，殆ど表記上の区別が現れていない。小論はこれらの諸点をも含めて，以下のような問題点を明らかにすることにより，韓国字音および日本字音，特に韓国字音と重韻との関連を解明しようとするものである。

まず泰韻合口が佳夬韻合口と違って／—oi／となっていることについて調べるために，両方の用例の分布をみると，後者が牙喉音に集中しているのに比べて，前者は初声全般に用例が現れている。一方，15～18Cの一般韓国語での／—oi／と／—wai／の分布をみると，／—wai／が現れるのは牙喉音と／s—／初声だけであって，他の初声の場合は殆ど／—oi／しか現れない。このような一般韓国語の音配列の傾向から，泰韻合口の／—oi／反例は説明できるものである。すなわち，佳夬韻合口はその用例が牙喉音に集中していることから，期待通りに／—wai／となるが，泰韻合口の場合は初声全般にかけて現れていることから，／—oi／の反例が現れているわけである。

また泰韻合口の牙喉音字は殆ど／—oi／となっているが，その用例をみると，「外」以外は殆ど「會」の諧声符をもつものであり，「會」の字は非常に使用頻度も高いものであることから，この場合は類推によって「會」声類のものが／—oi／になるものと考えられる。

山摂咸摂に関しては，仮に重韻の区別を想定するなら，蟹摂に倣って／—a—／と／—ɐ—／の対立が予想されるわけであるが，／ɐ／は漢字音では限られた場所でしか現れないことから，その対立が見られないものと考えられる。

0. 問題の所在

重韻については韓国漢字音や日本漢字音のような外国字音，特に韓国漢字音との関連に問題が少なくない。即ち日本漢字音の場合は覃韻に「曇ドム，貪トム，紺コム」などの例

があるにせよ，1—2 に述べるように，原則的に重韻の区別を失ったのに対し，韓国漢字音は蟹摂に，

哈韻類開口／—ɐi／：泰韻類開口／—ai／(注1)

哈韻類合口／—oi／：泰韻類合口／—wai／(注2)

のような対立が認められ，これには次のような解釈が存在する。即ち，河野六郎(注3) は蟹摂のⅠⅡ等の／—ɐi／と／—ai／とは，重韻の対立を表しているのではなく，旧層／—ɐi／の上に新層／—ai／が加わった結果であるとし，その根拠として，山摂咸摂には重韻の対立がみられないこと，対立がみられる蟹摂でさえかなりの数の反例が現れていること，特に泰韻合口の殆どの用例が／—wai／ではなく／—oi／となって，哈韻合口との区別を示していないことなどを挙げている。しかし仮に河野六郎の説に従うなら，次のような点が問題になる。すなわち，「孝経諺解，千字文，新増類合，訓蒙字會」を調べると，

- 哈韻類：／—ɐi，—oi／，泰韻類：／—ai，—wai／となって，重韻と対応するものが約77％であり，その逆のものは約16％に過ぎない。
- ／—ɐi，—oi／と／—ai，—wai／の分布をみると，泰韻類では両方がほぼ同じ比率で現れているのに比べ（但し泰韻合口の用例を除外すると／—ai，—wai／の方がかなり優勢—泰韻合口の用例を除外する理由は後述)，哈韻類では／—ai，—wai／は約10％に過ぎず，いわゆる古層を表す／—ɐi，—oi／の方が約80％もあり，圧倒的に優勢である。

小論では，河野六郎説で韓国漢字音における重韻の反映の否定の根拠となる，上述した三つの点(注4)について，韓国語音韻史をも考慮にいれながら吟味することによって，韓国漢字音と重韻とのかかわりを明らかにするのを主な目的とする。

1. 重韻について

1—1. 中古音の重韻について

中古音の重韻については，B. Karlgren をはじめとして様々な解釈があり(注5)，その全貌を明確にし難い。例えば B. Karlgren は中古音の重韻の差を哈韻類：泰韻類／âi：ái／のように Quantity の差によるものと考えており，韓国漢字音での哈韻類／—ɐi／：泰韻類／—ai／の対立をその理論的根拠としているわけであるが(注6)，韓国漢字音での哈韻類／—ɐi／：泰韻類／—ai／の対立が長短によるものかどうかも明らかでないので，それを根拠として中古音の重韻を考えるのは妥当でないと思われる。

重韻の差を何らかの Quality の差によるものとみた場合にも様々な解釈があり得る。それを主母音の前後の差によるものとみる説もあり(注7)，主母音の広狭の差によるものとみる説もある(注8)。

1—2. 日本字音の重韻について

中古音における重韻の解釈はおよそ上述のごとくであるが，日本字音ではいくつかの散発的な例を除くと，漢音呉音ともに重韻の区別を示していない。山摂咸摂蟹摂ⅠⅡ等の呉音についてまとめると次のようである。

山摂Ⅱ等山韻刪韻…／—en／閑ゲン　眼ゲン　限ケン　顔ケン　殺セチ…

／—an／八ハチ　刹サチ　察サチ……

蟹摂Ⅰ等哈韻泰韻…／—ai／海カイ，開カイ，来ライ，大ダイ……

／—e／礙ゲ，外クエ，会エ……

Ⅱ等皆韻佳韻夬韻…／—ai／皆カイ，界カイ，戒カイ，敗ハイ……

／—e／解ゲ，快クエ，畫エ

咸摂Ⅰ等覃韻…／—am／南ナム，男ナム，感カム……

／—om／紺コム，曇ドム，貪トム

談韻…／—am／甘カム，三サム，監カム……

Ⅱ等咸韻銜韻…／—em／減ゲム，狭ケフ，咸ケム

／—am／

このうち，咸摂Ⅰ等の覃韻に／—om／が現れているが，覃韻と重韻をなす談韻には／—am／だけであって／—om／は現れない。外転開口Ⅰ等の日本呉音の現れ方をみると，果摂／—a／，蟹摂／—ai，—e／，効摂／—au，—ou（唇音），—o（唇音）／，山摂／—an／，宕摂／—au／であって，／a／が重要層をなしていることから，覃韻の場合も／—am／が期待されるが，／—om／も／—am／と一緒に現れている点について，日本呉音での重韻の痕跡を示しているものと考えることも可能である。

1—3. 韓国字音の重韻について

まず蟹摂山摂咸摂ⅠⅡ等重韻の韓国漢字音での現れ方をまとめると次のようである。

表 1

韻摂	韻　母	開　口	合　口
蟹摂	Ⅰ等　哈韻	／—ɐi／	／—oi／
	Ⅰ等　泰韻	／—ai／	／—oi／（／-wai／）(注9)
	Ⅱ等　皆韻	／—ɐi／	／—oi／
	佳韻	／—ai／	／—wai／
	夬韻	／—ai／	／—wai／
咸摂	Ⅰ等　覃韻	／—am／	
	談韻	／—am／	
	Ⅱ等　咸韻	／—am／	
	銜韻	／—am／	
山摂	Ⅱ等　山韻	／—an／	／—wan／
	删韻	／—an／	／—wan／

咸摂山摂は重韻の両方とも／—am，an／となって，区別がまったくみられない。一方蟹摂は哈韻類／—ɐi，—oi／：泰韻類／—ai，—wai／となって，重韻の区別が反映されているように見える。それについて実際の資料—伝統的な韓国漢字音を比較的よく表しているといわれている「孝経諺解，千字文，新増類合，訓蒙字會」—をもって，字音の現れ方を調べると次のようである。

表 2

資　料	用例数	重韻と対応する形		重韻と対応しない形		その他(—oi, —ie など)	
孝経諺解	18	15	83.3%	3	16.6%	0	0.0%
千字文	51	39	76.5%	8	15.7%	4	4.7%
新増類合	150	115	76.7%	22	14.7%	13	8.7%
訓蒙字會	161	116	72.0%	29	18.0%	16	9.9%
計	380	285	77.1%	62	16.3%	33	5.8%

表2をみると中古音の重韻の区別と正しく対応しているものが約77%であり，中古音の重韻の区別と正しく対応していないものが約16%に過ぎないことから，蟹摂では韓国漢字音が重韻の区別とよく対応しているようにみえるが，ここで問題なのは泰韻合口である。表1で示しているように，咍皆韻開口／—ᴇi／，咍皆韻合口／—oi／：泰佳夬韻開口／—ai／，佳夬韻合口／—wai／となって，重韻の区別と対応しているが，泰韻合口は／—wai／が期待されるにもかかわらず，殆ど／—oi／として現れており，この泰韻合口の用例が全反例の多くを占めている。

2. 泰韻合口について

2—1，／—wai／の分布（1）

蟹摂のⅠⅡ等に該当する韓国漢字音に現れている主な母音には／ᴇi，oi，ai，wai／がある。そのうち／ᴇi，oi，ai／は，大抵の初声（頭子音）と結合して現れているのに比べて，／wai／は限られたところにしか現れない。／wai／が現れるところをみると，主に牙喉音の場合と／s／初声の場合である。

一方，歴史的な韓国語で，母音／ᴇi，oi，ai，wai／が現れているのを初声別に分類してみると，次のようになっている。

表 3

	牙喉音				舌音				歯音			唇音		
	k-	k^h-	φ-	h-	t-	t^h-	n-	r-	s-	c-	c^h-	m-	p-	p^h-
—ᴇi	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—ai	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
—oi	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
—wai	○	○	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×

（○：その初声（子音）とその母音との組み合わせが文献上現れているもの
×：その初声（子音）とその母音との組み合わせが文献上現れていないもの）（注10）

即ち／—wai／の場合は使われている環境が非常に限られており，一般韓国語で／—wai／が現れるのは，牙喉音と／s／の初声をもっている場合だけということであって次のように韓国漢字音での／—wai／の現れ方とほぼ一致している。

韓国漢字音の蟹摂合口は，牙喉音の場合／—oi，—wai／の両方があり，／s／初声をもっているものは／—wai／だけである。また／c^h—／初声をもつ諸字には／—oi，—wai／の両方がある。そのほかの初声をもっている場合は，／—oi／だけであって／—wai／は現れない。

韓国漢字音で／—wai／が期待されるところ，即ち泰韻合口と佳韻合口，夬韻合口がどのように現れているかを初声別に分類して表4で示す。

表 4

	泰　韻　合　口	佳夬韻合口	咍韻合口
牙喉音	／—oi／：會繪膾獪… （　／—wai／）：譃噦劃	／—wai／ 蝸夬畫…	省略
舌音　／t-，t^h-／	／—ai／：兌蛻… （／—ᵛi／）：祋	用例がない	省略
舌音　／r-／	／—oi／：酹	用例がない	省略
齒音　／c^h-／	／—oi／：最蕞粹椒	／—oi： 噦	／—wai／ ／—oi／
齒音　／s-／	用例がない	用例がない	／—wai／ ：碎誶

表4でみると，佳韻夬韻合口が比較的よく／—wai／となっているのに比べ，泰韻合口は牙喉音の一部に／—wai／が現れるだけで，その他は殆ど／—oi／となって，咍韻合口との区別がみられない。

2—2. ／—wai／の分布（2）——一般韓国語との関連から

表3では一般韓国語での各初声別の／—ᵛi，—oi，—ai，—wai／の現れ方を示したが，これをみると初声／t—，t^h—，n—，r—，c—，c^h—，m—，p—，p^h—／は／—wai／と結合した形が現れず，牙喉音と／s—／初声は／—wai／と結合した形が現れる。一方，漢字音の場合は表4で示しているように／t—，t^h—，c^h—，r—／は／—wai／と結合した形が現れず，一般韓国語と現れ方をほぼ同じくしている。このように／t—，t^h—，r—，c^h—／初声の泰韻合口が／—oi／となっていることは，漢字音の研究の際，一般韓国語音韻史とのかかわりをいつも考慮しなければならないということを物語っている。

一般韓国語で／wai／が現れている／s—／初声をみると，泰韻合口と佳韻夬韻合口では用例がないが，咍韻合口では「碎，誶」が／swai／として現れている。咍韻合口は／—oi／が期待されるところであるけれども，初声／s—／で／—wai／が現れているということは，簡単に反例として片付けるべき問題ではなく，韓国字音内部の問題として重視すべきである。咍韻合口の／swai／はその背後に一般韓国語の現れ方（即ち一般韓国語でも子音／s／と母音／wai／との組み合わせが現れているという事実）があったからこそ可能であったといえよう。このような反例の場合からもいかに漢字音が一般韓国語と密接にかかわりあっているのかということが窺われる(注11)。

2—3. ／—wai／の分布（3）泰韻合口と佳韻夫韻合口が異なる現れ方をすることについて

泰韻合口と佳韻夫韻合口の用例について調べてみると，表4で示しているように佳韻夫韻合口の用例は殆ど牙喉音に集中しており，一方泰韻合口の場合は牙喉音，舌音，歯音の全般にかけて現れている。このような両方の用例の現れ方の相違が，ⅠⅡ等の合口が平行的に行かないようにする原因になるのである。即ち用例の殆どが牙喉音に集中している佳韻夫韻の場合は，期待通り／—wai／になるのであるが，用例が牙喉音，舌音，歯音の全般にかけて現れている泰韻合口の場合は，一般韓国語でも牙喉音と／s—／初声以外の場合は母音／—wai／が現れないという事実との関連から，全用例のうち／—wai／が期待できる用例がかなり限定される結果となる。

表 5

	—wai が期待できるところ	一般韓国語との関連から—wai が期待できないところ
泰韻合口	牙喉音：—oi—wai	t—，t^h—，r—，c^h— の初声：—oi
佳夫韻合口	牙喉音：—wai	c^h—の初声：—oi

表5は初声別にみた泰韻合口，佳韻夫韻合口の用例分布を示したもので，この表をみると，泰韻合口は佳韻夫韻合口と違って，現れている用例が／—wai／が期待できる牙喉音だけでなく，一般韓国語との関連から／—wai／が期待できない／t—，t^h—，r—，c^h—／初声をも有していることを示している。従って，泰韻合口では／—oi／の反例が多く現れているわけであるが，問題なのは，／—wai／が期待できる牙喉音でさえ殆どが／—oi／となっていることである。泰韻合口と佳夫韻合口の用例を調べると，

泰韻合口の牙喉音の用例：／—oi／…會　膾　繪　獪…，外

／—wai／…譏　噦　劃

佳夫韻合口の牙喉音の用例：／—wai／…蝸　喎　媧…，掛　桂　卦……，拐　楫，夬　快　駃，噲　獪　澮

のようになって，泰韻合口の牙喉音が殆ど／—oi／となっているけれども，その用例は佳夫韻合口と異なり，／—oi／となっている用例の殆どが「會」諧声符をもっている。「會，膾，繪，檜，儈」の用例は古い伝統的な音を比較的よく表している前掲の四つの文献にも現れているし，また「會」の字は非常に使用頻度も高いものであるので，類推によって「會」声類のものが／—oi／になるものと考えられる。一方泰韻合口の牙喉音のうち「會」諧声符をもっていない「譏，噦，劃」は期待通り／—wai／となって，佳韻夫韻合口の牙喉音と同じ現れ方をしている。この泰韻合口の牙喉音の問題については，以下で他の反例の問題とともに論じることとする。

3. 反例について——諧声符による傾斜を中心として

咍韻類／—ai，—wai／：泰韻類／—ɐi，—oi／となって，中古音の重韻の区別に対応し

ていない用例を調べてみると，その反例には共通的な一つの特徴がみられる。それは諧声符を同じくするものが，集団をなして反例として現れているということである(注12)。そのような反例が共通的にもっている諧声符は次のようなものである。

①，咍韻類でありながら，／—ai，—wai／となっている反例が共通的にもっている諧声符と，それをもっている用例を次に示す。

表 6

諧声符	韻母	反例／—ai，—wai／	その他(注13)
豈	咍 開	剴 皚 凱 鎧 豈 塏 愷 闓 敱	
	咍 合		磑：訓蒙-ɯi，華三奎-ɐi
	咍 開	慨 漑 槩 嘅 概	
矣	咍 開	埃 騃 欸 挨	欸：-ɐi
	皆 開	挨	
介	皆 開	介 芥 疥 岕 价 芥 砎 玠 鮮 忿	界：類合訓蒙華三奎 kie
	泰 開	妎	
祭	皆 開	祭 瘵	
	泰 開	蔡 纘	
孛	咍 合	悖 誖 孛	
卒	咍 合	倅 淬 碎 啐 祽 焠 綷	淬：類合 soi，三奎 swai

（訓蒙：訓蒙字會，類合：新増類合，華：華東正韻，三：三韻声彙，奎：奎章全韻，＿：孝経　千字文　訓蒙　類合にも現れているもの，傍線がないものは，華東正韻　三韻声彙　奎章全韻にだけ現れているもの，韻母は平声で示す。以上は表7でも同じ）

②，泰韻類でありながら，／—ɐi，—oi／となっている反例が共通的にもっている諧声符と，それをもっている用例を次に示す。

表 7

諧声符	韻母	反例／—ɐi，—oi／	その他
解	佳 開	解 蟹 懈 廨 邂 擮 澥 嶰 繲	
帶	泰 開	帶 瘠 蹛	
	夬 開		懠：-ie
未	泰 合	昧 眛 沬	
頼	泰 開	頼 癩 瀨 籟 蘋	
會	泰 合	鱠 獪 膾 會 繪 薈 儈 檜 襘	
		旝 澮 鄶 廥 劊	
	夬 合		獪，澮，噲：-wai
	咍 合		譮：-wai

（華東では「解　帶　買　未　頼」は／—ai／となっている）

諧声符による類推は他の外国字音でもみられるが，韓国漢字音でもいたるところで発見できる。蟹摂重韻に関しても正例反例ともに，同じ諧声符を有する諸字が同様の現れ方をする傾向が著しい。表6の「介，既，祭，卒」諧声符や，表7の「解，會」諧声符などはその用例が多いうえ，「介，祭，卒，解，會」の用例は使用頻度も非常に高い。このような使用頻度の高い字が反例になることによって，同じ諧声符をもつ字も類推により反例になりやすく，その結果，反例の数が増えているものと考えられる。

また，「會」については，2—3でも取り上げているが，ここでもう一度触れてみる。「會」の諧声符をもつものの分布をみると，表7で示しているように，殆ど泰韻合口に属しており（「獪，澮，譮」は夬韻咸韻合口に属しており，／—wai／となっているけれども，比較的に基礎的な字を取り上げている四つの文献で現れている「膾，會，繪，儈，檜」はすべて泰韻合口であり，／—oi／となっている），重韻との対応から，また一般韓国語にも牙喉音には／—wai／が現れていることから，／—wai／が期待されるわけであるけれども，／—oi／と現れていることは，泰韻合口だけの問題として取り扱うべきでなく，反例の問題として，「介，祭，卒，解」などの諧声符をもつ反例と同じように処理すべきである。

次に反例のうち諧声符を同じくしているものがどのぐらい現れているかを調べるため，「孝経諺解，千字文，新増類合，訓蒙字會」で，表7，8の諧声符をもつものがどのぐらい現れているかをみると次の通りである。

孝経諺解：3例のうち　3例「愷　悖　解」

千字文：8例のうち　5例「芥　帯　頼　會　解」

新増類合：22例のうち17例「槩　慨　漑　悖　佩　碎　介　芥　帯　頼　會　膾　檜　懈　解　蟹　邂」

訓蒙字會：29例のうち19例「槩　埃　佩　帯　癩　瀬　儈　膾　檜　繪　介　疥　帥　芥　駭　挨　懈　廨　蟹」

このような，諧声符を同じくする反例を除外すると，反例が現れる比率は非常に低い。

孝経諺解：15例のうち0例0%，　千字文：39例のうち3例　7.7%

新増類合：150例のうち5例3.3%，訓蒙字會：161例のうち10例　6.2%

以上，中古音の重韻と韓国漢字音との対応に混乱が認められる場合は，「諧声符による傾斜」が重要な原因の一つであるということは明らかである。

4. 山摂，咸摂について

蟹摂では大抵咍韻類／—ɐi，—oi／：泰韻類／—ai，—wai／の対立をもっており，反例についてみると，主な反例である泰韻合口の牙喉音以外については一般韓国語との関連から，牙喉音については他の多くの反例と同じく，諧声符による傾斜によって説明できる。また蟹摂の唇音の反例については，小論では直接には触れていないが，結論だけをいうと，／p—，p^h—／唇音の反例は，前者は／—ɐi／と結合し，後者は／—ai／と結合するようになり，中古音との対応より，初声によって続きの母音が自ずから決まるようであり，従って，このような用例は中古音との対応の関係を調べる際には除外すべきである。以上のよ

うなことから，蟹摂が中古音の重韻の区別を反映していることは明らかであるが，もう一つ問題なのは山摂咸摂である。即ち山摂咸摂は蟹摂と同じように重韻を含んでいながら，重韻の両方とも／—an，—am／となって，その区別が現れていない。仮に山摂咸摂の重韻の一方を想定するなら，蟹摂が／—ɐi／：／—ai／であることから，／—ɐn，—ɐm／が考えられるわけであるが，漢字音での／—ɐ—／の分布はかなり限定されており，それが，山摂咸摂で重韻の区別がみられない原因であると考えられるので，まず一般韓国語や漢字音での／—ɐ—／の分布や現れ方を調べた後，山摂咸摂が蟹摂と違って，重韻の区別を示していないことについて述べることとする。

4—1. 母音／ɐ／について——一般韓国語の場合

韓国語の母音は，李基文(注14)によると，

表 8

高	ㅣ	ㅜ	ㅗ	高	ㅣ	ㅡ	ㅜ
↕	ㅓ	ㅡ	・	↕		ㅓ	ㅗ
低		ㅏ		低		ㅏ	・
	前 ↔ 後				前 ↔ 後		
（体系A　12—13C）				（体系B　15C）			

のような母音体系の推移を起こしている。また氏はこの母音推移について次のように述べている。

「この母音推移は恐らく前期中世語の／ə／が中舌の方へ（[e]>[ə]）入ってきたことが端緒になったであろうとみられる。この中舌化に押されて／ɯ／が上へ動き，この圧力で／u／が後舌へ動くようになったのであろう。／o／はさらに／u／に押されて下へ動くようになり，最後に／ɐ／がより下へ押されるようになったのであろう。このようにみる最も重要たる理由は／ɐ／の不安定性である。即ちこの母音は近代語になって完全に消失してしまうが，この原因は要するに，連鎖的な変化の末にそれが窮地に追いこまれたからだと言い得る。」(注15)

この母音推移の最も重要な理由としてあげられている／ɐ／の不安定性というのは，たぶん，母音／ɐ／が15Cから18Cにかけて，

15～18C：非語頭音節で／ɐ／>／ɯ／，18Cまで：語頭音節で／ɐ／>／a／のような変化を起こしており，結局は消滅してしまったことを意味しているのであろう。また氏は／ɐ／が変化し結局消滅したことから，この母音推移を push chain としている。即ち，この母音推移が drag chain であるなら，／ɐ／が変化し結局消滅するはずがないということである。

母音／ɐ／が上述したような変化を起こし，結局消滅したにもかかわらず，一般韓国語では母音／ɐ／が頻繁に使われた。例えば，／mɐr／は馬を，／mar／は言葉を意味するものとして使われた。即ち，一般韓国語ではハングルの表語性によって母音／ɐ／が—特に語頭の場合は(注16)—消滅するまである程度他の母音との区別が保たれてきた。また例え

ば馬を意味する場合は／mar／は間違ったものであり，／mʊr／が正しいといったような，いわば規範意識や，語尾を表すときは／tai／とはならず，／tʊi／となるといったような，文法的機能も母音／ʊ／と他の母音との区別に関与したものと考えられる。

以上のように，一般韓国語では文法的機能やハングルの表語性によって，／—ʊ／の表記が安定して現れているけれども，漢字音の場合は事情が違ってくる。

4—2. ／—ʊ／について—漢字音の場合

韓国漢字音では次のようなところに／—ʊ／が現れている。

①蟹摂のⅠⅡ等　②深摂，臻摂，曽摂のⅠⅢ乙等

③止摂の歯音　④そのほか散発的な例

止摂の歯音が／—ʊ／となっていることについては，有坂秀世の説がある(注17)。氏は韓国漢字音で止摂の歯音が／—ʊ／となっていることについて，これを韓国漢字音の近代的特徴として捉えており，またこれを有力な証拠の一つとして，韓国漢字音の開封音母胎説を主張している。

次に，深摂，臻摂，曽摂のⅠⅢ乙等について，その用例の現れ方を示す。

表 9

	Ⅰ　等		Ⅲ 等 乙	
	優勢な形	劣勢な形	優勢な形	劣勢な形
深　摂			—ɯm	—ʊm
臻　摂	—ɯn	—ʊn	—ɯn	
曽　摂	—ɯŋ	—ʊŋ —ʊiŋ	—ɯŋ	—ʊik

深摂，臻摂，曽摂はハングルのレベルで考えた場合，終声／—m／，／—n／，／—ŋ／をもっているところであって，そこに優勢な形として／—ɯ—／が，劣勢な形として／—ʊ—／が現れている。

終声／—m／を持っているところ…優勢な形／—ɯm／：劣勢な形／—ʊm／

終声／—n／を持っているところ…優勢な形／—ɯn／：劣勢な形／—ʊn／

終声／—ŋ／を持っているところ…優勢な形／—mŋ／：劣勢な形／—ʊŋ／

漢字音で，／—ʊ／がこのような現れ方をしていることには，やはり何らかの意味があると考えられるが，それが何であったかは必ずしも明らかでない。河野六郎は「朝鮮漢字音の研究」のなかで，／—ʊ／が現れているのは，蟹摂の場合をも含めて，一貫して‘朝鮮漢字音の新古層の現れ’と述べている。

この説のいくつかの問題点については既に触れてあるが，もう一つの問題点について考えてみよう。即ち，この説では，‘／—ʊ／の方が旧層’‘朝鮮の／—ʊ／は中国音の／ə／をよく写すものである’(注18)と述べている。

韓国語の母音／ʊ／が中古音の／ə／によく対応しているというのは事実であるが，しか

し，／—ɐ／の方が旧層であるかどうかについては断言できない。李基文によると(注19)，13Cの文献である「雞林類事」では，

韓国漢字音の／ɐ／：中古音の／a／の例……船曰擺　（船　／pɐi／）
梨曰敗　（梨　／pɐi／）
韓国漢字音の／ɐ／：中古音の／o／の例……一曰河屯（一　／hɐtɐn）
袴曰珂背（袴　／mɐbɐi）

のような例があるし，後の文献である「朝鮮館譯語」で，むしろ／—ɐ／と／—ə／が混同していることから，中古音の／ə／によく対応している／—ɐ／が旧層を示しているとは限らない。

とにかく，どのような経緯で深摂，臻摂，曽摂に／—ɐ—／が現れているのかは明らかでないが，ひとつはっきりしているのは／—ɐ—／が局部的に現れているのではなく，深摂，臻摂，曽摂の全般にかけて現れ，「優勢な形／—ɯ—／：劣勢な形／—ɐ—／」という対立をみせていることである。このような対立関係によって，／—ɐ—／が深摂，臻摂，曽摂に現れているといえよう。

4—3. 山摂，咸摂に重韻の区別がみえないことについて

山摂，咸摂は韓国漢字音で／—a—／という形をとり，一方蟹摂は／—ɐi，—ai／という形をとる。山摂咸摂と蟹摂との韓国漢字音での差は，一方が単母音であり，他方が二重母音であるということである。一般韓国語で単母音／ɐ／は二回にわたって「／ɐ／＞／ɯ／，／ɐ／＞／a／」という表記上の変化を起こしており，従って，母音／ɐ／の音価の変動というのも当然考えられる。それに比べ二重母音／ɐi／の方は，「／ɐ／＞／a／」の変化が完了する18Cまで表記上の変化がみられない。

先に見たように，深摂臻摂曽摂で／—ɐ—／が現れる理由は明らかでないが，注目すべき点は，深摂臻摂曽摂の全般にかけて／—ɐ—／が現れており，「優勢な形／—ɯ—／：劣勢な形／—ɐ—／」という対立を持つことによって，／—ɐ—／が続けて現れ得るということである。一方，蟹摂では重韻の区別を表すために／—ɐ—／が用いられたと思われるが，それが続けて現れ得るのは，いわゆる韻尾の位置に母音／—i／があるからである。すなわち，／—ɐi／は，／—ɐ／が二回の変化を起こしたのに比べ，その変化が終わる18Cまでなんの変化もなかったことによって，蟹摂に／—ɐ／が現れ得るのである。一方山摂咸摂の場合も，重韻を含んでいることから，／—ɐ—／が現れる可能性はあるものの，韻尾の位置の／—i／の助けがないことから，山摂に二三の散発的な／—ɐ—／の例を残すにとどまったのである。

(注)

1. 便宜上咍韻皆韻を咍韻類，泰韻佳韻夬韻を泰韻類とする。
2. 但し泰韻類合口のうち泰韻合口は殆ど／—oi／となっている。
3. 「朝鮮漢字音の研究」『河野六郎著作集2』
4. 河野説の三つの点は，山摂咸摂には重韻の区別が見られないこと，蟹摂でもかなりの反例が現れていること，泰韻合口が／—oi／となっていることの三点である。
5. Karlgren の音価推定は「趙元任　李方桂訳『中国音韻学研究』pp 478-483，李敦柱訳『中国音韻

学』pp 57-60」による。

平山久雄の音価推定は『中国文化叢書1言語』pp 146-148。

薫同龢の音価推定は『漢語音韻学』pp 162-180,「孔在錫訳『漢語音韻学』pp171-190」。

王力の音価推定は『漢語史稿上』pp51-54。

6. Karlgrn の前掲書の同ページ
7. 薫同龢はⅠ等重韻の対立をA：ɑとしているが，氏の附音標簡表（漢語音韻学330 p）によるとA：ɑは低の位置における前後の対立を示している。
8. 平山久雄はⅠ等重韻をA：ɑの対立とし，Ⅱ等重韻をa：ɐの対立としているが，ＩＰＡ記号によると広狭の対立と考えられる。
9. 泰韻合口は／—wai／が期待されるところであるが，若干の例が／—wai／となるだけで，殆どが／—oi／として現れている。
10. 「南廣祐編『古語辞典』，劉昌惇著『李朝語辞典』」による。
11. 蟹摂の合口の用例で／—wai／が期待されるのが／—oi／となる反例は多いが，その逆は極めて少ないという点と，一般韓国語からみて，用例が豊富な／—oi／から，環境による制約のため用例が非常に少ない／—wai／となっていること，から考えてもこの用例は簡単に反例として片付ける問題ではなく，消極的ながらも韓国音韻史との関係を示しているものと見るべきである。
12. ここでいう諧声符というものは，必ずしも音符を意味しているのではない。
13. 「その他」は主に／—wi，—ie，—ui／などがあり，俗音などがこれに含まれている。小論では重韻との対応を調べるのが目的であるため，重韻との正しい対応を示しているものとその逆になっているもの以外のもの，すなわち／—ɐi，—ai，—oi，—wai／以外のものはその他とする。
14. 李基文『国語音韻史研究』pp 101-124
15. 李基文著　藤本幸夫訳『韓国語の歴史』157 p
16. 非語頭の場合は語頭より早い時期から／—ɐ／>／—ɯ／の変化を起こした。
17. 「漢字の朝鮮音について」『国語音韻史の研究』
18. 河野六郎「朝鮮漢字音の研究」『河野六郎著作集2』pp 455-457
19. 李基文『国語音韻史研究』pp 101-124

（筑波大学博士課程　文芸・言語研究科　日本語学）